

自律神経機能検査 第4版

日本自律神経学会 ● 編

千葉大学名誉教授 平山恵造

本書は初版（1992）から第2版（1995）、第3版（2000）と改訂を加え、本第4版は7年の歳月を経て上梓された。この間隔は改訂に当たった課題の整理に費やされた時間と労力の大きさを示すもので、従来の改訂にも増して苦勞の多かったことを物語っている。序文にあるごとく、自律神経系を知るにはその機構を理解するだけでなく、機能異常の具体的な把握方法が求められる時代であり、それに役立つ機能検査法を提示する必要がある。しかも、読者対象を研修医、医学生に限らず医療従事者を広く視野に入れて取り組まれたがゆえの、編集に要する歳月であったと思われる。その結果、第3版より新たに15項目が追加され、執筆者も大幅に変更され、実際に随所で内容の改変がなされている。

さて、本書をひもとくに当たって、本版編集の経緯を理解した観点から眺めると、その背景を知らずに眺めるのでは、若干、見え方が異なるように思われる。この2つの観点から書評してみよう。

第1の観点から本書を眺めると、編集方針に沿って、それなりに整理、修正し、個々の内容が拡充され、いくつもの苦心の跡が見てとれる。企画段階で繰り返し検討がなされたも

のと推察する。今日の有用な自律神経機能検査を網羅するものと評価されよう。なお、「第4版で削除または内容修正された項目があり、それらについては第1～3版を参照されたい。」とあるが、（それは容易でない）それぞれの理由を新版（第4版）の当該項目の中で示されれば、理解がいつそう深まったのではなかろうかと思われる。

第2の観点から書評するとしよう。自律神経系という network の機能検査法を整理するのは、まことに厄介である。本書では大きく総論と各論とに分けられ、機能検査法以前の事項はすべて原則として総論の中で扱われ、各論は検査法自体から成っている。その扱いは理解できるが、しかし読者の立場からすると、ある1つの系統については、機能解剖、臨床症候、病態機序、そして機能検査法と一連の流れで、すなわち総論部分から各論部分を通して、まとめられていると理解しやすいように思われる。個々の検査法の記述の冒頭には「原理・目的」があるが、実際には総論部分と結びつき難い（総論部分のない系統もある）。また、検査法の中で相対的に臨床的検査と研究的（特殊な機器・設備を要する）検査とが、順序性をもって配置され



ていると、いつそう有用と思われるところがある。

以上、2つの観点から書評したが、いずれにせよ、本書は現時点での最も詳しい自律神経検査書と言うことができ、推奨に値する。

B5判, 452頁

定価 12,600円（本体 12,000円）

ISBN 978-4-8306-1535-1

2007年7月1日・文光堂 発行